

身近なまちの風景物語(9)

しなやかな纏まとい

暮らしの場には多種多様な自然がある。例えそれが小さくても生命の息吹を感じる。

さざなむ水面と川のせせらぎ、揺れる緑の森と葉音、旋回する野鳥とさえずり、セミの抜け殻と鳴き声。雨上がりに這うカタツムリ、あぜ道から聞こえるカエルの声、夜に響くコオロギの涼しげな音色、水田からの稲穂の匂い。

まちの風景は視界に入るものだけではない。耳に入る音、鼻に入る匂い、肌をなでる風など、風景を体で感じることができる。

こうした風景には一年の周期がある。そこにはリズムがあり、高低、強弱の旋律（メロディー）がある。その変化によって、季節感を味わうことができる。

庭先の梅がほころび、道端の紫陽花あじさいが雨に濡れ、裏庭から金木犀きんもくせいの香りが漂い、街路樹の公孫樹いちょうが色づき、銀杏ぎんなんの匂いがする。

まちを歩くと季節に応じた色と匂いをふんだんに感じる、はずである。夕食の準備をしている台所からの匂いに空腹感を覚えるのと同じだ。

こうした小さな自然を風景として紡ぐことを意識すると、まちの周囲にある雄大な自然も身近に感じることができる。

ゆったりと蛇行しながら流れる川も、緑豊かに連綿と続く山々も、暮らしの風景に欠かせない。こうした川や山は天候や時間、季節に応じて、様々な様相を呈する。

その一つに山桜がある。わたしたちが生まれるよりも前から、まちを見守っている。必ず毎年、山桜の花が色づく春がやってくる。あたかもまちをしなやかに包み、多様な色まとを纏って、微笑んでいるようだ。

音楽の三要素を風景にも当てはめれば、残る一つはハーモニー（調和）である。人の営みである暮らし方と自然の営みである生命の息吹との調和が、まちの風景を豊かにする。わたしたちはこの調和を大切にしたい。自然の営みに畏敬の念を抱く暮らし方（ライフスタイル）を意識したい。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）